様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年 １１ 月 ３０ 日現在

機関番号：３０１０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３０９１２

研究課題名（和文）幼児期の自分描画法（ＳＰＭ）に関する臨床基礎研究

研究課題名（英文）A basic clinical study of the self-portrait method in infancy.

研究代表者
小山　充道（KOYAMA, MITSUTO）

藤女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：２０１７０４０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：2011年度は4人の子どもを対象とした母親の育児日記ノートをもとに、ビデオ映像、各種描画等を用いて親の思いの分析を行った。2012年度は幼稚園児にSPMを実施した結果、絵に題名をつけてもらうと面接に繋がる対話が引き出せることが見出された。2013年度はSPMに関する独自のアンケートを実施した。SPM簡易マニュアルがあれば、親子が家庭でSPMという落書き遊びができることがわかった。最終年度はSPMに関する映像教材の作成とSPM簡易マニュアルの作成を行った。４年間で予定した研究は順調に実施され、その成果もたくさん得られた。現在、過去11年間にわたったSPM研究を著書としてまとめる作業に入っている。

研究成果の概要（英文）： In 2011, I undertook an analysis of The thoughts of parents regarding their child during child-rearing. In 2012, I implemented SPM directly with 39 infants in 2 kindergartens. The results showed that a procedure is necessary to help infants understand SPM, and asking the infant to give the drawing a title was found to be able to draw out conversation that could lead to an interview. In 2013, a questionnaire on SPM designed by the author was distributed among the infants and parents/guardians of S Kindergarten. This indicated that if an easy-to-understand SPM manual were available, parents and children could engage in SPM-style “graffiti-play” at home. In 2014, the author undertook work on the Production of picture teaching materials for SPM and a simple SPM manual".
All of the research initially planned has been carried out, with many results obtained as shown above. The total work on SPM underaken over the past 11 years is now being collected into a single volume.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自分描画法　思いの理論　対話療法

１．研究開始当初の背景

心理療法と関わる描画法はグッドイナフテスト(1926)やHTPテスト(Buck;1948)、バウムテスト(Koch;1952)、動的家族描画法(Burns&Kaufman;1972)等が知られ、日本でも風景構成法(中井；1969)、MSSM法(山中;1984)等が開発された。描画法の多くは心理査定の道具として開発され、描画を治療的対話とを結びつける発想に乏しい。河合創案の箱庭療法(1966)は心理査定と心理療法の双方を包含するが、箱庭道具がなければ心理療法はできない。簡便でかつ心理査定と心理療法の両方の機能をもつ描画法の開発が求められる。筆者は病院および教育現場での心理臨床経験を30年もつが、この間対象者が用紙にクレヨンや色鉛筆で絵をおもむろに描いている姿に何度も出会い、筆者は描画に投影されているのは「人の“思い”」ではないかとの感触をもつようになった。筆者創案の自分描画法(Self-Portrait Method;以下SPMと略す)では、『自己像(自分を描く)』→『自分と関連する人や物のありかた（気になる人や物、出来事等を描く)』→『自分が置かれている心理的環境(背景を描く)』→『隠れているものの存在(“用紙のどこかに何かが隠れていますね。何が隠れているのでしょう…)”と教示し深層にふれる)』を順次描いていく。思いの始まりは心の中で描く落書きに似て、この落書きが“いくつかの要素とある構成”を得て思いの形となる。思いの生成仮説から生み出されたSPMは、臨床現場から得られた。筆者は「SPMの手法は、思いを浮かび上がらせるための自然な心の発露」と考えている。

SPM研究は、日本学術振興会科学研究補助金（萌芽研究『“自己描画法”に関する臨床発達基礎研究～描画の収集と質的分析』小山充道；信州大学、2004-2006年度）と同（基盤研究C『自分描画法に関する臨床基礎研究～思春期・青年期への取り組み』小山充道；名寄市立大学、2007-2010年度）を得て7年間取り組んできた。前者では小学生から高齢者まで1299名のSPMを得て、発達的特徴について検討した。後者では大学生・高校生・中学生を対象として、個別事例によるSPMの収集を加え、思いの生成についてより詳細な検討を行った。この7年間は日本心理臨床学会、日本箱庭療法学会および日本心理学会で毎年研究発表を継続しながら、拙著『必携　臨床心理アセスメント（金剛出版;2008)』でSPMを公表。各発達段階におけるSPMの特徴については、日本心理臨床学会においては、2004年発表「自分描画法研究―保育園児から40歳代まで適用の結果わかったこと」から2006年「幼児期、脳外科手術を受けた女子中学生の苦悩と心の成長～自分描画法を用いて“思い”をつかむまで」を経て、2010年「高校における自分描画法の活用に関する検討]まで毎年研究発表を行い研究結果の還元を行った。このほか2005年「自分描画法研究－中学生の資料分析（箱庭療法学会)」、日本心理学会においては2007年「青年期の自分描画法」から2010年「自分描画法(SPM)とTATにおける有用性に関する比較」まで毎年研究発表を継続している。論文では「自分描画法を用いた高齢者に関する臨床心理学研究－高齢者と大学生の思いの特徴；高齢者問題研究(2008)」や「多彩な身体症状と就労困難を訴えた男性に対する自分描画法の適用；名寄市立病院医誌(2009)」など執筆を行った。SPMについては臨床科学的データの積み重ねがなされ、このあと幼児期のSPMのデータのみ残し、SPMのまとめの作業に入った。今回は幼児期のSPMに取り組む。

２．研究の目的

自分描画法研究第3段階にあたる「幼児のSPM研究」では、次の4つの研究に取り組む。

1) 幼児期における「思い」がどのようにして生成されるのか、自験事例により取り組む。
2) 落書きは思いの生成の始まりと考えられるが、落書きの要素と構成に関する研究を行う。
3) 幼児のSPMを収集し、分析を加える。同時に個人対面法で、数例のSPMデータを得る。
4) 幼児～高齢者データの全てを得

た後に、「生涯発達における SPM の特徴」について検討を深める。この作業を終えて、SPM の基礎研究が終了となる。

3．研究の方法

学術的な特色

SPM は自己像の歪みを検出するなど心を外界に投影する心理査定法であるほか、対話面接を行いながら描画することから、対象者にとって興味深く馴染みやすい心理療法という側面を合わせもつ。SPM では錯綜した自己像と自分を取り巻く環境との関係が描画に投影されるため、自分という存在に対する気づきが高められる。SPM は病者及び健常者にとって、自分というものによりふれ得る有効な道具となる可能性をもっている。対話を重視する心理療法の道具として SPM が用いられるのであればその有効性は拡大する。これまで SPM を導入することで心理療法における対話がスムーズになった、自己への振り返りが比較的短時間に行われ、わりと抵抗なく対象者が抱く“思い”が深められたこと等、SPM は対象者の心の質的分析に役立つことが明らかになってきている。SPM は日本文化に深く根付く“思い”にふれる手法である。本法を学術的に位置づけることによって、心理療法の幅がいっそう拡がると思われる。

2) 独創的な点

SPM は筆者の長年の臨床経験から創案されたものであり、海外からの輸入が多い心理療法の中に国産の心理療法を加えることができる。本法はパーソンセンタードアプローチを背景としており、現象学的・人間主義的なものの見方に支えられている。“思いの理論（小山；2002）は、脳障害者心理臨床で得られた、1000 人を超える事例より導かれた理論である。筆者は SPM を、思春期・青年期に広げ（小山；2002）、今回幼児にも展開し、生涯発達の視点から SPM を考察する。パーソンセンタードアプローチという慣れ親しんだセラピーに、日本独自の“思い”という視点を加えて新しい心理療法の構築に取り組んでいきたい。

4．研究成果

「幼児期の自分描画法（Self-Portrait Method；以下 SPM)に関する臨床基礎研究」というテーマで、4 年間にわたり以下の研究を実施した。

2011 年度は、「育児中の子どもに対する親の思い」に関する分析を行った。研究に用いた道具は 4 人の子どもを対象とした母親の育児日記ノート 36 冊、ビデオ映像、音声記録、各種描画等であった。その結果、親は第 1 子に対する思いが、第 2、第 3、第 4 子に対して同様に繰り返されるわけではなく、親自身も育児を通して変化し成長し続けることがわかった。落書きの構成要素については「気になるもの」→「背景」→「自分」→「隠れているもの」の順で心理的抵抗が減少した。落書き絵はこの 4 要素でほとんどが占められていた。

2012 年度は、筆者が直接２園の幼児（全 39 名）に対して SPM を実施した。藤幼稚園児に対しては数名のグループで SPM を実施し、ミナクル幼稚園児に対しては個別に SPM を実施した。その結果、SPM を理解するには手順に工夫が必要、“自分”を描く際は「誰の絵かがわかるように、最初に○○ちゃんの絵を描いてみて」と言うと意図が伝わりやすい、絵に題名をつけてもらうと面接に繋がる対話が引き出せること等の知見が見出された。

2013 年度は札幌あかしや幼稚園児とその保護者を対象として SPM に関する独自のアンケートを実施した。その結果、多くの保護者が「幼児の描画には思いが表れやすい」と答えた。アンケート用紙には SPM の

手順をわかりやすく示したが、保護者は教示内容を読むだけでSPMの実施を終えることができたのは特筆できる。わかりやすいSPMのマニュアルがあれば、親子が家庭でSPMという落書き遊びをすることができることがわかった。

最後の2014年度は女子大学生を対象としてSPMを実施した。目的は全員の落書きおよびSPMに、上述の４要素が描かれているかどうかの確認にあったが、予想通り全員の描画に４つの要素が描かれていた。このほか「SPMに関する映像教材の作成」、「SPM簡易マニュアルの作成」を行った。

研究成果については質的側面の分析結果に関しては日本心理臨床学会で、そして量的側面については日本心理学会で毎年研究発表を行い、研究成果の還元を図った。

以上、４年間で予定していた研究は順調に実施され、その成果も多く得られた。現在、過去11年間にわたったSPM研究を著書にまとめる作業に入っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

・小山充道「落書きの心理学的分析」藤女子大学紀要　第48号（第Ⅱ部）。159-176頁

・小山充道「子どもの心理アセスメント　ー　基本と留意点」児童心理、12月号臨時増刊、942号　21-31頁

・小山充道「自分描画法（Self-Portrait Method）とTATにおける心理療法的有用性に関する比較研究」藤女子大学人間生活学部紀要　第51号57-72頁ほか

〔学会発表〕（計９件）

・小山充道（2011）「心理臨床における自分描画法の役割と対話の効果」日本心理臨床学会第30回大会（九州大学）

・小山充道(2013)「幼児の自分描画法」日本心理臨床学会第32回大会（東京大学）

・小山充道（2014）「自分描画法における幼児の“思い”の特徴」日本心理学会第78回大会（同志社大学）ほか

〔図書〕（計３件）

・高橋依子・津川律子編（2015）「第６章思春期（教育場面）小山充道担当」遠見書房56-74頁

・小山充道（2015）「自分描画法」遠見書房（印刷中）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

小山充道　（KOYAMA MITSUTO）

藤女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：20170409

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：